「知ってからやる獣害対策」

① ～知らなけりゃ逆効果～

こんにちは。平成24年度から広島県のみなさんと獣害対策をご一緒しております井上雅央です。誌面で少しずつですが、一緒に勉強していきましょう。獣害は住民の皆さんや行政の担当者がほんの少し勉強するだけで、解消できます。しかし、被害が起きてから腹立ち紛れ、思いつきの方法でやってしまえば、被害防止どころか、火に油、逆効果の対策となりかねません。

例えば電柵の線、知らずに地面からの高さをいい加減に張ってしまえば電柵でなくただのヒモです。もし、地面からの高さが３０センチだと、最初からおでこに触れてしまいますから平気でそのまま潜り抜けます。それどころか、電柵の線をくぐって餌にありついたイノシシは、電柵さえ探せば餌がある（食べれる）という学習をしてしまいます。イノシシが感電するのは毛のない鼻先だけ、感電させるためには一段目は地面から２０センチということさえ知っていれば、こんな失敗はしませんね。アスファルトの道沿いに張る（通電しない）、電圧が３０００ボルト以下に落ちたまま放置する、夜だけしか通電しない、稲刈り後は電気を切ってしまうといった初歩的な間違いをする人がいれば、その地域で電柵が効かなくなることも知っておきましょう。

② ～原因はあなた自身の餌付け～

あなたの集落で年々被害がひどくなるのは、その原因はあなたの集落のみんなで餌付けを進めていることが原因かもしれません。

集落総出で何キロもの柵を設置したのに被害が止まらないというのは、その柵が餌付けを進めてしまう設置方法、管理方法になってしまっているということです。柵が出来れば動物は必ず柵にそって歩きます。そんなことも知らずに人間の都合で、道路など一箇所でも閉鎖できない箇所を作ってしまえば、その柵は、平気で集落内の道路を歩くことを教え、彼らの餌場を広げるだけの餌付け柵です。

餌付けされた動物は遠い山には帰らず集落内に潜みます。それを知らないから、潜み場を無くす作業や追い払いもせずに、いきなり柵を設置してしまう。最初からサファリパークですよね。

駆除だって、箱ワナに来ているイノシシの足跡サイズも確認せず最初にウリ坊をとってしまえば、毎年５匹も子どもを産みながら自分は絶対に捕まらない親イノシシに餌付けするだけのことです。

住民は見ているだけ、来たら駆除を頼むというのは、里に定住するイノシシやシカを増やすだけの餌付けだということも知っておいてください。

「知ること」がいかに大切か、少しは分かっていただけましたか？

③ ～餌付けは人なれ学習から～

獣害対策とはズバリ、一人でも多くの人が餌付けをやめることにつきます。そのためには餌付けがどうすれば成功するのか知っておく必要がありますね。実は、餌付けに成功する条件はたった二つ。一番目の条件が人なれ学習、二番目が豊富な餌の準備です。何をやってもダメなら、それは二つの条件がそろったままということです。

いくら動物にとっていい餌があっても怖くて畑に近づくことが出来なければ餌付けは成功しないはずですよね。実は意外なところであなた自身が知らぬ間に人なれ学習をしているのです。

集落内で農道を夜に車で通ったらシカを見たことがあるあなた。道端でシカが草を食べているのに、それを見ながら横を通ってしまったとしたら、それだけであなたはシカに「このあたりは車も乗ってるヒトも怖くないぞ」ということを学習させてあげたことになるのです。家屋（たとえそれが廃屋でも）や畑の至近距離にちょっとしたススキやカヤの草むらができてしまったり、収穫も剪定もやめたイチジクやウメなど数本の放任果樹の茂み、棚が朽ちてジャングル状態のキウイフルーツなどがあるだけでイノシシやシカなどの動物は安心してそこに潜み、人の声や農機具の音などに慣れていきます。

④ ～餌付けは人なれ学習から(続き)～

サルの人なれ学習はどうやってすすむのか、これを知らない人の多い地域では、サル対策をやればやるほど、ずる賢く集落付近に居つくサルの群れを増やしてしまうことも知っておいて下さい。

サルの群れが稲刈りの終わった冬の田んぼに出ている時。その横の道をあなたが「サル、たくさんいるけどあそこでレンゲ食べてるならいいや」と思って追い払いもせずに見ながら通ったとします。

この「見ながら何もしないで通る」行為こそが最悪の餌付け行為なのです。サルに「レンゲは自由に食べてもいいけど、横のダイコンやハクサイは食べてはダメ」って教えること出来ないですよね。

「収穫後のソバ畑で落ちたソバの実拾ってるならいいや。」「廃園のミカン食べてるならいいや。」「おお、今日は畑荒らしせずに畦の草を食べているのか、子ザルは案外可愛いものだなあ。」

もし、あなたがそんなことを考えながらサルを見ていたとしたら、あなたこそがサル被害を激化させる餌付けの張本人ってことです。

満腹できた上にこの集落の人は怖くないって毎回「人なれ」学習させてあげたわけですよね。

⑤ ～「自分でやる」と「やってもらう」～

今、全国で獣害対策が二極化しています。許容コスト内でさっさと被害をとめて、ますます元気になっていく集落と、行政主導の対策をいくつも導入しながら失敗を繰り返す集落です。

前者は、例えば稲作農家でも、まるで獣害なんか止めて当たり前。「そりゃあ、こんな山の中でコメ作るんだ、いもち病も紋枯れ病もウンカもシカもイノシシも防がないことにはなぁ。」と涼しい笑顔です。

一方、後者は「駆除も大規模柵もやったが被害はとまらん、抜本的対策はないのか！」と声を大に叫んでいます。

どうしてこんな差がつくのか、皆さんはもうお分かりですよね。

そう、まさに「自分でやる」と「やってもらう」の差なんです。

「自分でやる対策」なればこそ、いろんな創意工夫もわいて来るし、やっているうちに動物が何をやらかすのかも自然に理解できます。畝立て、田植え、剪定から残渣処理まで、様々なところで獣害への配慮も生まれます。さらに、自然発生的な工夫の教えあいや追い払いの協力から住民同士の連帯感も広がりますよね。

⑥ ～大切な地域のリーダーさん～

前回は「やってもらう」より「自分でやる」話でした。

地域にすぐに補助事業を口にする行政依存型のリーダーさんがいるところでは、地域全体のやる気、創意工夫、連帯感が封印され、いつまでたっても「やってもらう」から卒業できません。

これに対して「自分でやる」気のリーダーさんがいる地域では、自分たちがいったい何をやるべきか、みんなで勉強し始めますよね。「自分でやる」対策の特徴は、視察した人たちが、これなら出来そうだという気持ちになり、あちこち「自分でやり始める」ことです。

島根県の美郷町吾郷地区をモデルに、広島県でも、大規模農家も家庭菜園だけの住民も、みんなでサルを追い払い、放任果樹を伐採するなどの取り組みが行われるようになりました。また、リーダー格の議員さんが率先して市の職員に混じって勉強会に出たり、共同作業で汗を流す地域も増えてきました。

さて、いよいよ次回からは、餌付けをやめて獣が見向きもしない集落を作るにはこの順序しかない！というお話です。

⑦ ～この順序が大切～

さて、いよいよ実践ですね。被害防止で最も大切なのは対策の順序です。順序さえ守れば獣害は確実に防止できます。たった４項目ですのでしっかり覚えてください。

ステップ①　「みんなで勉強」

集落のみんなで、被害とは？対策とは？など、獣害対策の基本となる正しい知識を学びます。

ステップ②　「守れる田畑、集落への改善」

守れる畑、守れる集落への改善に各自が出来る範囲で取り組みます。この取り組みをすっ飛ばすと対策は全部逆効果となります。

ステップ③　「囲いや追い払い」

ほんの少し勉強して守れる田畑に改善するだけで、囲いや追い払いがこんなに効くのか！ということを体験できます。

ステップ④　「個人ではムリなこと」

①～③を実践した集落で、それでも被害が止まらない場合にのみ駆除など個人ではムリな対策を考えます。

次回は①から順に各ステップでの留意点などを考えましょう。

⑧ ～ステップ①、みんなで勉強～

みんなといっても住民は様々です。専業農家もいれば家庭菜園だけの方もいます。中には獣害が防げなくて畑を荒らしてしまった人もいますよね。

若い人から高齢者まで、一つの家族でも父ちゃんだけでなく家族のみんなが勉強することが大切です。

獣害対策の協議会などで研修会を開かれることが多いのですが、協議会の構成メンバーだけが対象のことが多いようです。

同じ集落にいながらメンバー以外はカヤの外ではみんなとは言えませんよね。

主催は協議会でも集落のみんな、時には近隣の集落にも声がけして興味ある人は誰でも臆せずに参加できる雰囲気の勉強会にします。

駆除と柵といったステップ④が対策との思い込みの激しい協議会よりも、むしろ、公民館活動、老人会やＪＡ婦人部の行事、果樹や野菜の生産部会などが主催する勉強会のほうが地域の対策は進み始めるかも知れません。

勉強の内容はというと、「被害とは餌付け、対策とは餌付け防止にすぎない」ということ（①～⑥で記載済み）ですよ～！

⑨ ～ステップ②、守れる田畑や集落への変身（その１）～

前回まで、通して読んでいただいた方は、対策とは餌付けをやめるだけってこと覚えてますよね。つまり、動物に、身を潜める場所もないし、行っても餌にはありつけないって思わせる嫌がらせの出来る田畑や集落にさえすればいいだけですね。獣害対策では最も大切なステップなので、集落、田畑に分けてお話しします。

今回は、「まずは守れる集落への変身。」

いくら個人で頑張っても集落の中に、自生したり放置された餌源があれば、餌付けは進み、動物は集落内で増え続けます。

そうした餌源の中でも最も最優先で、何とかしたいのが、クワの大木や収穫しないカキ、ミカン、イチジク、クリなどの果樹類、田畑や家の至近距離にあるカシ、クヌギなどドングリのなる樹木。

こうした餌源が大量に放置された集落環境は、クマの出没も増え、タヌキ、アナグマなどが住み着き、農作物被害だけでなく、人身被害やダニ、ヒルなど健康被害も心配なんです。

一本ずつでいいですから、合意の得られたものから、伐採したり巻き枯らして無くしていって下さいな。

⑩ ～ステップ②、守れる田畑や集落への変身、（その２）～

さて、今回は守れる田畑への変身の話ですよ～！

動物が安心して近づきやすい田畑を近づきにくい田畑にかえて下さい。でないと、どんな柵もすぐ効かなくなるどころか、柵を探して寄ってきちゃいます。

水田の至近距離や畦に潜み場、ありませんか？

法面の肩なんかにイチジク、カキ、ウメ、アジサイ、ボケ、なんか植えていませんよね。

茂みがあれば、危険を察知した動物が潜み場として利用できるため、安心して近づける、狙われやすい水田になりやすいのです。

次に一部が山林と接している水田。水田にヒノキの下枝、カシやグミ、ツバキ、ササ藪が迫っているなら、これは最も狙われやすい水田です。数メートルは動物が潜んだら見えるくらい下枝だけでも切り払い、ササ藪も刈り払って下さい。

それでも山側から入られるという人は最初から山際の３～４条、田植えをやめて水田の中に「柵しろ」を作って下さい。

水田の中に張った電気柵、びっくりするくらい効きますよー！

【著者紹介】

氏名：井上　雅央（いのうえ　まさてる）

広島県鳥獣被害対策スペシャリスト。 奈良県出身、島根県在住。1949 年生まれ。

主な経歴： 愛媛大学大学院農学研究科修士課程修了。京都大学博士（農学）。奈良県農業試験場、果樹振興センター、高原農業振興センターを経て、2010 年 3 月まで（独）農研機構　近畿中国四国農業研究センター鳥獣害研究チーム長。